

## 川平ひとし先生追悼特集の辞

川平ひとし先生は、二〇〇六年四月二十三日朝、逝去された。享年五十八。

先生は、一九七八年に跡見学園女子大学文学部国文学科の専任講師、八一年に助教、八八年に教授となられた。その在職は二十八年の長きに及ぶから、先生の人生の半分は跡見とともにあったことになる。

その穏やかで確固たる人柄、愛情深い教育への情熱、鋭敏にして卓抜な業績を振り返るとき、跡見が先生を喪失した悲しみははかりしれない。ここに先生を追慕し、先生の遺稿と追悼文を掲載する。

先生の遺稿は、二〇〇五年八月八日、岐阜県郡上市大和生涯学習センターにおいて、古今集成立一一〇〇年記念シンポジウム「古今集―注釈から伝授へ―」において報告されたものである。今、ご遺族のお許しのもとに、その発表内容を原稿にした。この原稿化にあたっては、先生の業績を知悉する、お茶の水女子大学の浅田徹助教授に、全面的なご協力をいただき、前文となる解題をお書きいただいた。浅田先生には深く感謝したい。

コロンビア大学のハルオ・シラネ教授からは、五月十四日、アルカディア市ケ谷における「川平ひとし別れの会」の席上、読みあげられた弔辞の掲載をお許しいただいた。文末が五月十日になっているのは、弔文をメールかファックスでいただきたい旨、電話をかけてお願いしたからであろう。しかし、先生ご自身がニューヨークから飛んで

来られた。そういう事情を反映した原稿と考え、そのままにした。

川平先生の代表的著書は、学位論文であり、なおかつ角川源義賞を受賞した『中世和歌論』（笠間書院 二〇〇三年）だが、一千頁に垂んとするこの著書のほかに、数多くの業績が残されている。先生がご存命なら、それらに手を入れ、さらに新たな著作群として姿を現したにちがいない。過去のものをそのままにまとめるのは、先生のご遺志に背くところがあるかもしれない。しかし、学問のリレーのためには、先生の著作はまとめられる必要がある。それは、多くの研究者たちの望むところであって、現在、その刊行計画が進みつつある。本誌があらためて、先生の略歴と業績一覧を記録としてとどめることをしないゆえんである。

先生は、病床に伏されてから、歌人となった。三枝昂之先生の主宰するりとむ短歌会に入られ、その詠作はゆうに一冊の歌集を編むにたるほどの歌数になった。生前、先生ご自身が歌集を世に残すことを望んだという。その歌は、硬質の叙情を湛えつつ、みずからの生を見つめた極めて完成度の高いものである。私たちは、一瞬の輝きののちに消えた歌人をもうしなったことになる。それらの歌もいずれ私たちの目の前に姿をみせるにちがいない。

ご遺稿掲載にいたる事情と弔辞掲載の経緯を記して、川平ひとし先生追悼の辞とする。

神野藤昭夫 記